令和元年１０月２５日

登米市議会議長
及川　昌憲　殿

会派名　　新・立志の会
代　表　　岩淵　正宏　印

調　査　報　告　書

調査の概要は次のとおりであります。

記

１．調査目的　　いま、本市で抱える課題について、行政視察をおこない
本市の事業執行に寄与するため

２．調 査 先　　秋田県男鹿市「ナマハゲによる今後の観光振興の取組み」
秋田県能代市「学力向上の取組みと高齢化社会への取組み」

３．調査期間　　令和元年１０月１５日から
令和元年１０月１６日まで　　２日間

４．調査の経過と結果並びに所感　　別紙の通り

５．添付書類　　調査地毎報告書、調査経費内訳書、領収書（写し）

６・調査者氏名　　岩淵　正宏　　八木　しみ子　　日下　俊
関　　孝　　佐々木　好博

登米市議会
1.10.25
受付

会派研修行程表

１０月１５日（火）

７：３１発　JR くりこま高原駅
１０：２４着　JR 秋田駅
１０：４０発　同上
１１：３０着　道の駅オガーレ
　　施設見学、昼食
１３：３０発　道の駅オガーレ
１３：４０着　男鹿市役所
１４：００　視察研修　ユネスコ無形文化遺産『ナマハゲ』による観光産業について
～１６：００
１６：３０発　男鹿市役所
１８：００着　能代市（宿泊）

１０月１６日（水）

８：００発　宿泊ホテル
８：３０着　能代市役所
９：００　視察研修　①能代市の学力向上対策について
～１２：００　②能代ふれあいプラザ・サンピノの取り組みについて
１２：００発　能代市役所
１２：２０着　能代ふれあいプラザ・サンピノ
１２：３０～　施設見学、昼食
１３：３０発　能代ふれあいプラザ・サンピノ
１４：３０着　JR 秋田駅
１５：０６発　同上
１７：５６着　JR くりこま高原駅

調査報告書

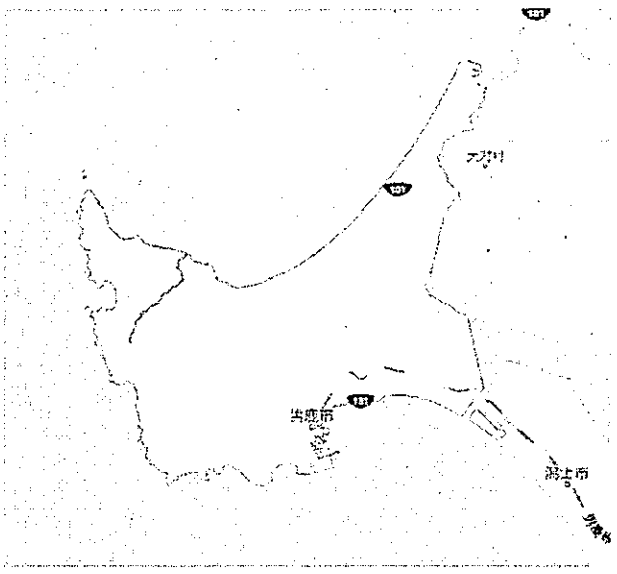
男鹿市

ナマハゲによる今後の観光振興の取組について

・地域での伝統文化振興の推進体制及び取組状況
・ユネスコ無形文化財登録後の市内の変化
・まちづくりへの活用の具体的取組
・インバウンドの取組
・今後の展望

調査月日　令和元年 10 月 15 日
調査場所　秋田県男鹿市
説明員　男鹿市観光文化スポーツ部　観光課
　課　長　三浦　一孝
　副主事　伊藤　直子
　班　長　伊勢谷　毅
案内員　男鹿市議会事務局
　副事務局長　岩谷　一徳
　局長補佐　清水　幸子

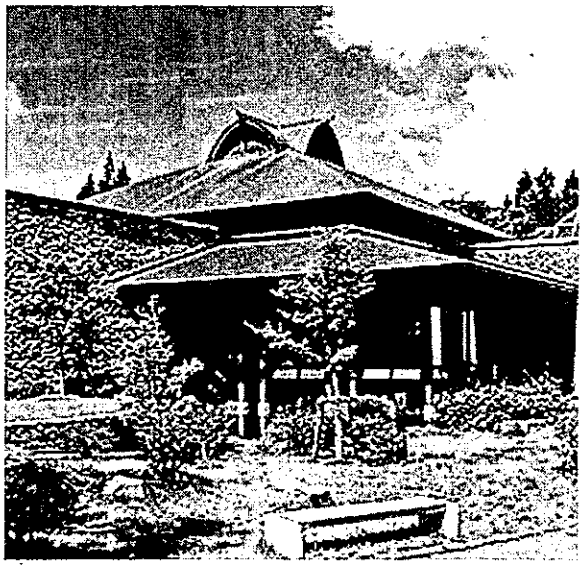
男鹿市概要



男鹿半島

男鹿市は男鹿半島のほとんどを占め、三方を日本海に囲まれている。男鹿半島には、寒風山と本山の 2 つの山があり、滝川を初めいくつかの河川が海に向かって流れる。

来訪神ナマハゲに代表される市であり、男鹿温泉郷と共に男鹿半島の地勢を活かした観光に力を入れてきた。これまでもナマハゲを観光の中心に据えナマハゲ館などを備える。最近では道の駅「オガーレ」をオープン。同市の情報発信と共に集客への取組を行っている。



なまはげ館

道の駅「オガーレ」

登米市との比較

項目	登米市		男鹿市	
総人口	81,959 人	344位 (815市区中)	28,375 人	738位 (815市区中)
人口増減率 (2010年／2015年)	97.6 %	388位 (815市区中)	87.9 %	809位 (815市区中)
人口増減率 (2005年／2010年)	94.0 %	708位 (815市区中)	90.6 %	802位 (815市区中)
人口増減率 (2000年／2005年)	95.3 %	707位 (815市区中)	93.5 %	784位 (815市区中)
人口 (男)	39,837 人	346位 (815市区中)	13,301 人	744位 (815市区中)
人口 (女)	42,122 人	341位 (815市区中)	15,074 人	732位 (815市区中)
人口性比 (男／女)	94.6 %	359位 (815市区中)	88.2 %	710位 (815市区中)
世帯数	26,196 世帯	415位 (815市区中)	11,147 世帯	727位 (815市区中)
昼間人口	77,559 人	346位 (815市区中)	26,810 人	750位 (815市区中)
将来推計人口指数(2045年)	63.5	586位 (802市区中)	36.5	797位 (802市区中)

調査目的

地域伝統文化と景勝を観光の主体として取組を行ってきた男鹿市の事例を学び、「ナマハゲ」の世界無形文化遺産登録を機に今後の施策等の展望について学ぶ。

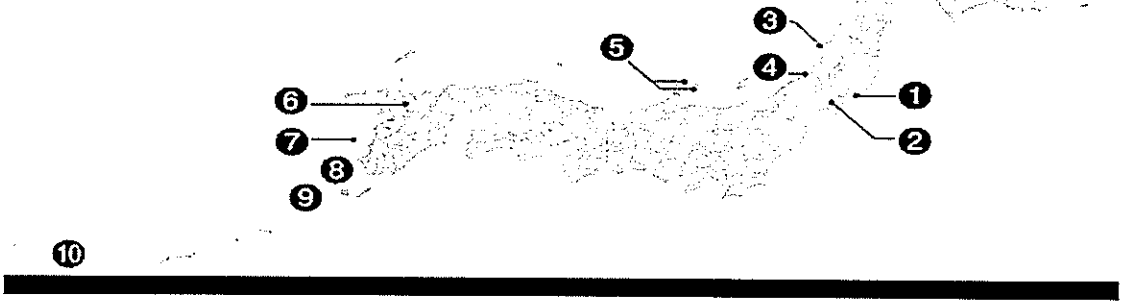
＊ユネスコ無形文化遺産について

ユネスコ無形文化遺産の中で東北地方では、男鹿市の他、山形県遊佐町、岩手県大船渡市そして登米市の 4 市町が認定された。中でも男鹿市は「来訪神全国連絡協議会」の会長及び事務局を務めており、今回の「米川の水かぶり」ユネスコ認定にも多大な貢献を頂いた。その男鹿市において、文化遺産を活かした観光産業の取組について視察をし、登米市にも活用できる取組及び支援について研修を行ったものである。

「来訪神：仮面・仮装の神々」ユネスコ無形文化財

「来訪神」を構成する行事

甑島のトシドンは2009年に登録済み



男鹿市行政視察所見

男鹿市の人口は28,375人（H27年国勢調査）であるが、年間の観光客数は187万人、うち宿泊者数12万7千人（H29）で、観光客消費額は58億8千万円の経済効果をもたらしている。男鹿市総合計画の将来都市像には「活力ある地場産業の構築と思いやりで創りあげる『教育・観光・環境が豊かな文化都市』」とあり、教育と観光に並々ならぬ力の入れようであった。それは、H30から教育委員会から文化財部局を移管し、教育委員会は学力向上を主とし、文化とスポーツは観光に結び付け、観光文化スポーツ部として組織改編したことにも見て取れる。これは、文化財保護法で市長部局でも扱えるようになったことからの措置である。このことにより、一層、文化財を観光に活かすことへの連携強化が図られるのではないかと感じた。

ナマハゲは市内の各地域に伝承されており、各町内会に、地域文化継承事業補助金として、〔基本額1万円＋ナマハゲ行事実施には300円×世帯数〕を交付し、事業の継承を支援している。また、市内小中学校では子ども達に、「神の教えは道徳である」と、伝承教育に努めている。

ユネスコ登録後は男鹿市長もプレゼン等でナマハゲを活用したり、観光庁直轄の「多言語解説整備支援事業」の採択を受けるなど、国等のインバウンド受入体制整備に係る事業が採択されやすくなったり、対象行事として声をかけられやすくなったという。

今回の視察から得たものは、総花的なまちづくりより、市の「売り」・「特色」に特化したまちづくりの方が、住民の連帯感を高め、訪れる人にいいまちだと感じさせてくれると実感した。本市においては、9町域多くの無形文化財が存在している。一度途切れると復活が難しいのも事実である。いかに守り伝承していくか喫緊の課題である。各保存会に補助金交付だけではなく、コミニティスクールで行事の歴史的教育をするなどし、興味と感心をもってもらうことが継承に繋がるのではないだろうか。県指定・国指定を目指すためには、市内外での発表の場を確保し、メディアに取り上げられるのも方法の一つ。そうすることにより、観光と結び付けることができる。そのためには、保存会単独・町域単独の事業継承だけではなく、教育委員会及び商業観光課や市民協働課等の横のつながりを密にした、市一丸となった取組みを提言していきたい。

能代市

1　学力向上の取組について

・学力向上対策の取組の背景と経緯

・学校・家庭・地域での取組状況

・学校・家庭・地域における変化

・今後の展望

2　能代ふれあいプラザ・サンピノの取組について

・複合施設整備の経緯

・在宅福祉拠点としての機能推進体制と取組状況

・定住、市民及び世代間交流の促進体制と取組状況

・地域間交流や施設間交流の取組状況

・地域における施設整備の効果

調査月日　令和元年10月16日

調査場所　秋田県能代市

説明員　議会事務局

事務局長　伊藤　勉

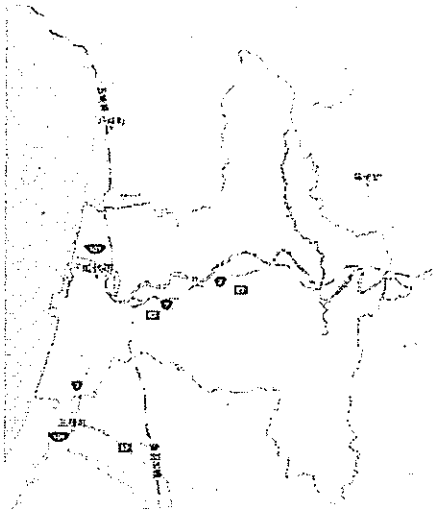
福祉部　長寿いきがい課

課　長　有山　勇

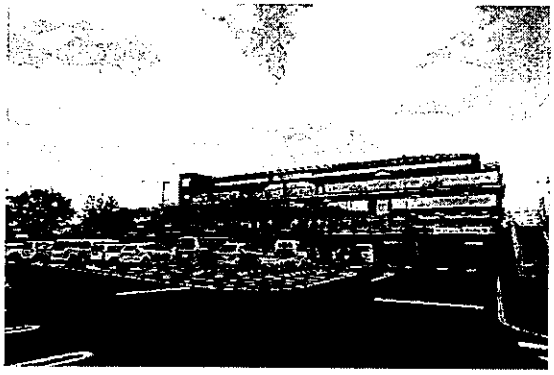
課長補佐　銭谷　進

能代市概要

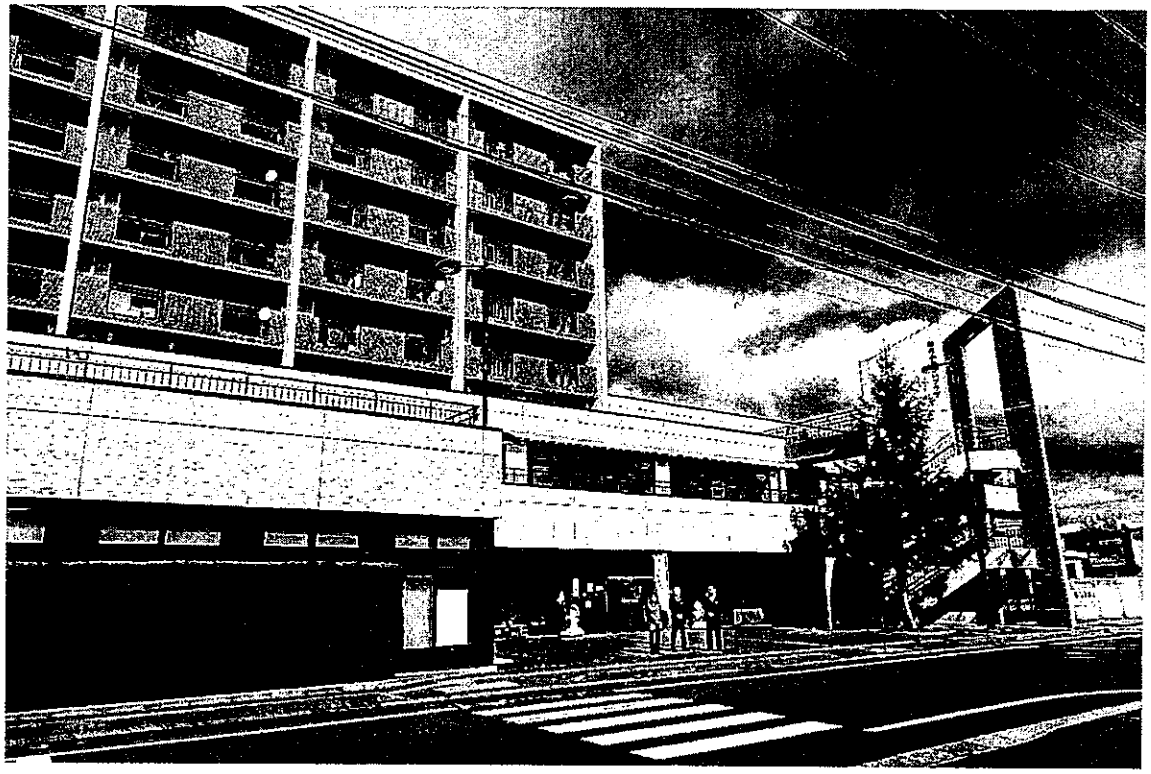
秋田県の北部に位置し、日本海に面している。市域のほとんどは能代平野に属する平坦地。全国学力テストでは常に上位に位置し、全国からその教育方針に対して注目を集めている。また、現在自然エネルギー利用として風力発電に注力している。



能代市



能代市役所



ふれあいプラザ　サンピノ

登米市との比較

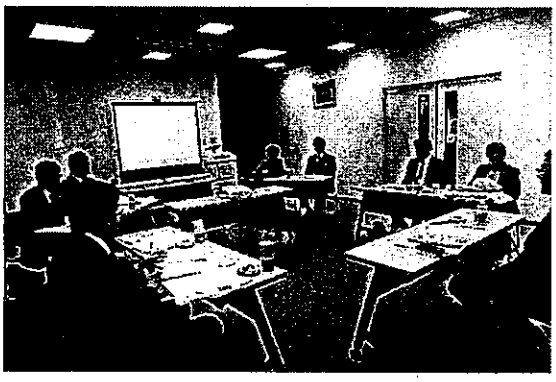
項目	登米市		胆沢市	
総人口	81,959 人	344位 (815市区中)	54,730 人	504位 (815市区中)
人口増減率 (2010年／2015年)	97.6 %	388位 (815市区中)	92.6 %	722位 (815市区中)
人口増減率 (2005年／2010年)	94.0 %	708位 (815市区中)	94.0 %	708位 (815市区中)
人口増減率 (2000年／2005年)	95.3 %	707位 (815市区中)	96.4 %	621位 (815市区中)
人口 (男)	39,837 人	346位 (815市区中)	25,170 人	524位 (815市区中)
人口 (女)	42,122 人	341位 (815市区中)	29,560 人	480位 (815市区中)
人口性比 (男／女)	94.6 %	359位 (815市区中)	85.1 %	797位 (815市区中)
世帯数	26,196 世帯	415位 (815市区中)	22,371 世帯	473位 (815市区中)
昼間人口	77,559 人	346位 (815市区中)	57,241 人	461位 (815市区中)
将来推計人口指数(2045年)	63.5	586位 (802市区中)	50.4	753位 (802市区中)

調査目的

1　現在登米市の子供たちの学力は全国的に決して良いとは言えない状況にある。これから学校再編を控え学力向上の取組と併せ、これまで能代市が行ってきた学校再編の考え方なども含め学び、登米市の学校再編と学力向上について参考にしたい。

2　高齢化と加速する人口減少に対して都市機能をどの様に再構築していくのか。これまでにない複合施設「サンピノ」からその考え方を視察研修から学び、登米市の都市としての機能のあり方と公共施設の今後の方向性について参考にしたい。

男鹿市役所：学力向上の取組について



サンピノ：高齢化社会への取組につて

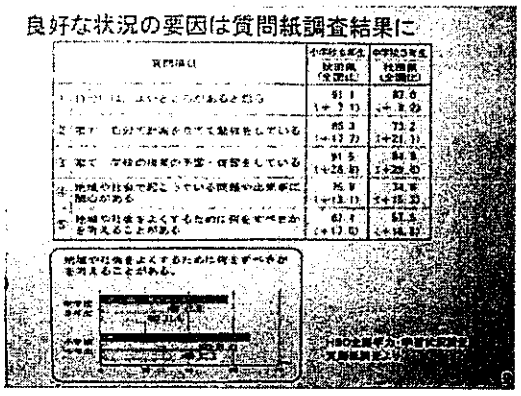
能代市行政視察所見１（学力向上対策）

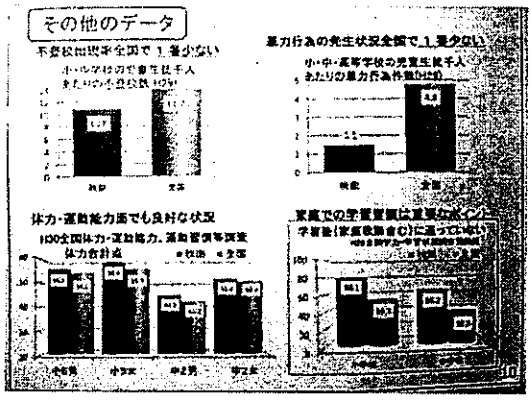
現在登米市では学力向上のために教育委員会からも能代市に何回も職員を派遣している。常に全国トップの能代と登米には何処にその差があるのか。今回の研修を通して能代市の「学力向上」の全体像を学ぶことが出来た。

1　根底にあるもの

学力向上の取組の根底には地域での「人づくり」への想いが、行政だけでなく民間レベルまで昇華された結果でもあると感じた。つまり、子供たちの学力向上を目標としている訳ではなく、現在の高学力の状況は「人づくりの結果であり、人づくりのための教育」という理念が、能代の子供たちの学力向上に繋がっている。また、県を挙げてこの取組が達成されて来た訳には「県民性」という面もあるという。

人を育てると言う理念は、子供たちへのアンケート結果や不登校や暴力行為の調査データにも見て取れる。





2　連携体制１（全県的取組）

県の教育委員会と市の教育委員会の連携がしっかり構築されている。秋田県の取組は能代市の取組でもある。県の様々な施策が、各学校長単位にまで周知徹底されている。その体制状況は全県指導主事等連絡協議会により構築されている。

県と市の指導主事が年２回開催される会議での内容を、共通認識として共有することで形作られている。12 月には今年度の問題や課題等の洗い出し、翌年４月には反省を踏まえた新年度の方針等を全県的に共通認識となるように実施している。

登米市を含めた宮城県としては能代市と秋田県のような連携が不足し「ダブルスタンダード」にはなっていないか改めて再考しなくてはならない。

連携体制２（教員・学校・地域）

重要視されているのは、一人ひとりの先生方が同じ方向を向き、意思統一されるこ

と。また、学校とともに親や家庭、そして地域がその方向性や施策に対して共通理解を持つことが秋田の子供たちの学力向上へと繋がっている。

これは長年の地道な取り組み（平成５年から秋田県の教育の根幹として実施）により、現在の親の世代もこの全県挙げての取組の中で育ってきたことが、教育方針への地域理解が進んでいる一つの要因と言える。また、これまでの取組の成果により親たちや地域と教育の現場や教育行政への信頼関係が構築されている。

登米市においてもこの信頼関係を築いていく事が第一歩となる。行政、教育現場、地域が一体となって未来を担う世代への取組を「教育」という形で進めていかなくてはならない。

具体的な方策について

1　学校の環境づくり（環境改善に向けた研究主任の権限充足）

研究主任には大きな権限を与えており、学校内の様々な状況を把握できるように専念出来る様に配慮されその環境が作られている。研究主任は各学校を回り、それぞれの学習事情を学んでいる。その結果、自校の問題点を洗い出し、教員の授業への取組を充実させている。

具体的な内容としては、教員に時間的な余裕が無く、授業以外の部分でのプレッシャーが増える事により安易にドリルなどの単純な反復練習だけになってしまう事への対処など、問題解決に向けて常に他校の研究主任と情報交換を行い対処している。

2　授業の質（プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ）

秋田県では連携を基にした教員が学ぶ共同研究体制が構築されている。授業の流れ、板書、ノートの取り方などが県内で統一されている。

3　教育専門監の活用

教科指導の卓越した教諭の能力を最大限活用する体制が構築されている。これはその教科に優れた指導を行える教諭を県が認定し、本務校以外の学校へ派遣し、チームティーチングや各種研修会の講師、教育実践を行うもの。また、その下には学校ごとにコアティーチャーを設置、全県に各教科ごと小・中２名ずつ全６名体制で全県で学校間を移動しながら授業提示や情報交換、支援を行っている。

これらの取組により教員全体の指導力の維持・向上が図られている。

4　探求型授業

秋田県でＢ問題（活用問題）が良好であるのは「つながり視点」での授業体制にある。

これは「問い」を発する子どもの育成として平成23年からの取組により実施されてきている。受けの一方通行的授業ではなく、自ら問題を発見し他人との対話を通して主体的に問題解決に取り組んでいくもの。その授業の流れは下記のようになっている。

1) 学習の見通しをもつ

⬇

2) 自分の考えを持つ

⬇

3) ペアや集団で話し合う

⬇

4) 学習内容や学習方法を振り返る

自分から問いを発し、課題に対して深く理解していく授業が展開されている。

5　個人ごとの学習体制

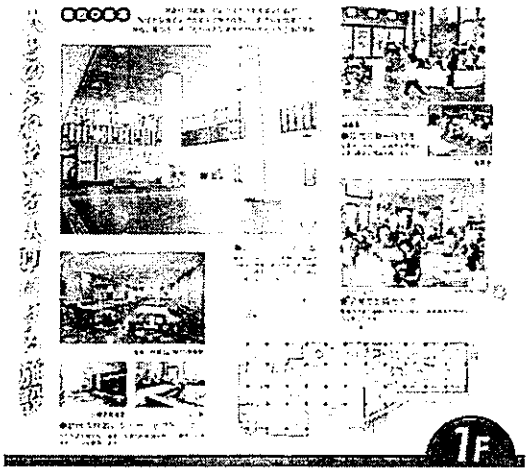
学習の方法が分からない子供がいた場合など、全県を挙げての取組として学校ごとの学習の手引きなどネットでも公開している。学校では、子供たちに何のために勉強するのか？をしっかりと理解をさせるように取り組んでいる。授業の中では（振り返り）の時間がそれにあたる。また全県的に家庭学習ノートの取組をしており、その内容を公開し、学習の方法など勉強方法も共有するようにしている。（これは、子供たちのモチベーション向上にもつながっている一つの仕掛けづくりでもあり、各学校単位で独自の取組が展開されている。）

総括

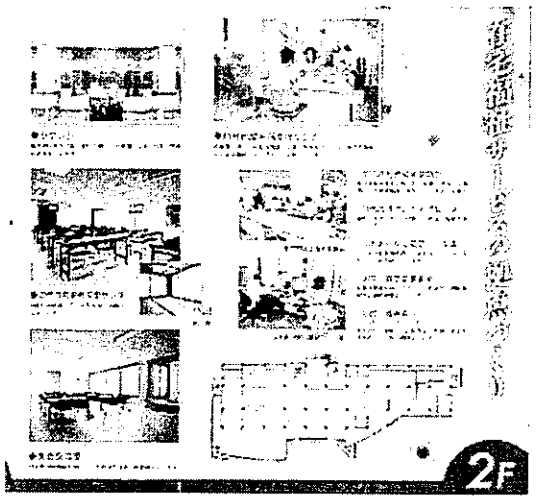
登米市教育委員会ではこれまでの能代市での研修を活かし「登米市学習スタンダード」を始動させた。能代市の事例を研修した結果からの成果と考えるが、子供たちの学習力向上には「時間」を有する。見習うべきは地域のつながりと人づくりがその根底にあり、地道な努力が欠かせないということだ。教育は学校現場だけで図られるものではない。行政・学校・地域・家庭が一体となって初めて実現していく。登米市の未来は将来を担う子供たちにその全てが掛かっている。今私たちに不足しているものがあるのならそれを見つけ出し、補い前進させていかなければならい。その指標として子供たちの学力向上があると感じた。

今回の研修は単に学力向上の取組と言うよりは、能代市や秋田県が目指す「人づくり」、地域への想いを強く感じた研修であった。登米市も能代市の教育理念に学び素晴らしい「人づくり」をしていかなければならない。

能代市行政視察所見２（複合施設サンピノ）



平成16年から運用している施設であるが、この施設で特筆すべきは、現在多くの地方都市が抱える問題「高齢化の急激な進展」「人口減少」「中心市街地の空洞化」に対応するべく計画された建物であり、その機能集約は多くの諸問題解決に向けた一つの方向性を示すものと考える。



設立経緯

平成６年策定の能代市保健福祉計画が発端となり、平成８年の第四次能代市総合計画を経て平成13年着工される。

建物概要

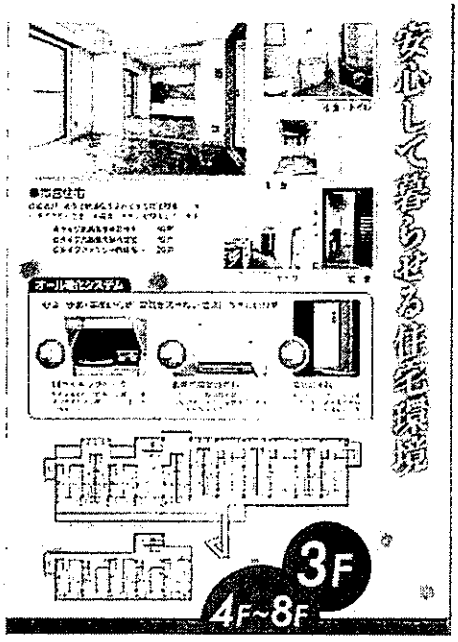
構造　　RC造一部３階８階建て

事業費　本体工事

2,320,749千円

工事管理・土地代

2,501,407千円



施設機能

1F

デイサービスセンター・保育所

子育て支援センター

2F

地域包括支援センター・社会福祉協議会

ボランティアセンター・居宅介護支援事業所

訪問介護事業所・高齢者友愛センター

ふれあい安心電話コール室

3F～8F

市営住宅　高齢者単身向け・高齢者夫婦向け・ファミリー向けの３タイプ

一つの建物の中に子育て支援機能と高齢者支援機能が備わり、居住空間まで提供されていることにより、同じ空間内で世代間交流が自然と形成されている。しかも市の中心地に建設されていることにより、その利便性は高く、定期的に開催される各種イベント等により周辺地区住民との交流も図られ、良好なコミュニティが形成されている。

この建物の計画実現には行政の中でも緻密な連携があったからこそ実現できた。

市民や時代のニーズに応えられる形の行政運営が求められている中、この建物が形として実現した意味は大きい。登米市においても今後の施設整備計画においてはそれぞれの部局が有機的に連携していくことが大切と考える。

一つの施設が多くの地域課題解決の足掛かりになっていることは大いに参考にすべきだと感じた。

研修全体を振り返って

今回の研修からは男鹿市・能代市とも、共通のテーマが見えた。それが「つながり」である。それは部局間のつながりであったり、地域とのつながりや世代間のつながりであり、または県と市などの行政間のつながりである。

様々な「物」と「事」がつながっていくことにより様々な問題解決への道筋が出来ていく。能代市では将来像を「〝わ〟のまち能代」をキャッチフレーズとしてまちづくりの基本理念としている。

登米市としてもあらゆる繋がりを創り出し、様々な課題解決に向け努力していかなければならない。そのために必要な考えや取組を議会や議員がこれからも提言して行く事が必要だと感じさせられた研修であった。